

# 平成23年度 刈谷城跡確認調査 現地説明会

刈谷市生涯学習部 文化振興課

平成24年 2月25日(土)10:00～ 於：亀城公園内

## 1. 刈谷城について

刈谷城は天文2年(1533)に、後に知多半島に一大勢力をもつことになる水野氏が、金ヶ小路のほとりに築城したのが起り、江戸時代になって、水野勝成を初代藩主として、9家22人の藩主によって刈谷藩が治められた。

明治4年の廃藩置県後、刈谷城は政府の所有となり、城郭建築は入札によって払い下げが行われ取り壊された。その後は大正2年に大野介蔵に売却され、保存されたことを経て昭和11年に刈谷町に売り渡され、翌年には亀城公園となった。

江戸時代中期までの城絵図では、本丸の北西と南東の隅には2層の櫓があり、南東隅櫓の両側には、多門櫓が石垣とともに延びて表門・裏門へと続いていることが確認できる。

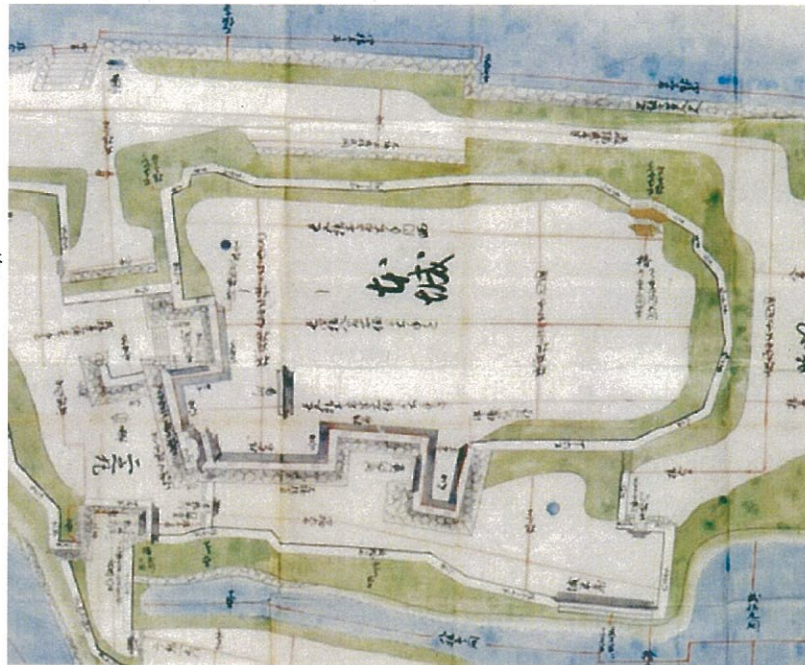


図1 刈谷城絵図(本丸部分 江戸中期)

## 2. 調査の経緯

本年度の発掘調査は、昨年度に引き続き亀城公園再整備事業に基づくものである。調査区は本丸部分と帯郭部分に設定し、平成23年12月上旬から順次調査を開始した。調査面積はおおよそ550㎡である。

## 3. 調査の目的

調査の目的は、表門や裏門、石垣、多門櫓などの広がりや配置等について確認することである。これらの遺構に関連すると考えられる、地固め遺構や礎石跡をはじめとする遺構について、前回の調査結果に基づき、調査範囲を面的に拡大した。大きくは以下の4項目についてが、主な調査対象である。

- (1) 本丸の南側と東側の外周線(5区・7区・8区・9区・11区)  
(表門と裏門から延びる石垣や多門櫓の延びる方向)
- (2) 表門の位置(2区)
- (3) 裏門の位置(5区・9区・10区)
- (4) 南東隅櫓の位置(3区・7区)

## 4. 昨年度の調査成果

A区…A区では、南北方向に並ぶ礎石跡6基とその東側に溝を確認した。東側の礎石列と溝跡の間隔は約1.65m(5尺)である。これらの遺構は城絵図と比較すると、表門の付近に位置することから、確認した礎石跡と溝跡は、表門の礎石跡と表門の屋根から落ちる雨水をうける雨落ち溝である可能性が考えられる。

B・C区…南東隅櫓から北東へ延びる多門櫓の櫓台の石垣の地固めと思われる遺構が北東方向へと延びている状況を確認した。

D区…D区でも、地固めと思われる遺構を確認した。D区では2列の地固め遺構を確認しており、多門櫓の櫓台の石垣の内側と外側に相当すると考えられる。地固め遺構の構造は、西側が約0.3m、東側が1m以上と深さが大きく異なっている。また、調査区の北東部で北西-南東方向に並ぶ3基の礎石跡を確認している。これらの礎石跡は城絵図と照らし合わせると裏門の付近にあることから、裏門や付近の多門櫓に関連する建造物の基礎の一部である可能性がある。

## 5. 本年度の調査成果

### (1) 本丸の南側と西側の外周線について

帯郭で拳大の川原石が詰められていた溝を検出した(SD1・2・6)。SD1・2は南西-北東方向に延び、北西方向へ鉤状に曲がる。SD6はSD1・2とほぼ平行なラインでコの字状に延びることが確認できた。幅は約2.2m前後である。確認できた深さは、帯郭の8区と本丸の5区では、約2.7mである。

SD2は上下を城の造成土に挟まれていることから、造成時に本丸の斜面に土を盛ると同時に、SD2に詰まっている石も盛られたと考えられ、検出状況や断面観察からはSD2のほうがSD1より古い可能性がある。

SD6は、昨年度に検出した地固め遺構の両隅を9区と11区で確認したものである。一部を掘り下げたところ、他所では見られなかった大きな石が確認できた。その石の本丸側と外側の両方に、拳大の礫が充填されていたが、特に本丸側は礫の間に粘り気のある土が詰められていた。

これらの溝は、位置や埋められ方から、石垣を築くための地固めの痕跡と考えられ、本丸の石垣はこれらの溝の上に廻っていたと考えられる。

### (2) 表門について

2区において調査中で、調査区の南部では、SD1の検出時と同じように拳大の礫が広がっている様子が確認できている。これらは城絵図との位置関係から、表門から西側の土塁にいたる多門櫓の櫓台に関する地固めの遺構の可能性はある。

### (3) 裏門について

南東-北西方向に延びるSD1とSD6の間で、裏門に関連すると考えられる斜面と平坦地、および溝状の遺構(SD7)を検出した。斜面が急峻であることや、1条ではあるが掘り込みらしきものが確認できることから、かつては階段があったと推定できる。斜面の上にある平場は、SD7を境にして北の方が約0.3m高くなっている。この差は門の内と外の違いによる可能性があり、SD7は門の内と外を画する段差か溝が埋まった跡と考えられる。

また、門の内側にあたる場所では、礎石跡と考えられるSK1とSK2を検出した。直径約1.1m、深さ約0.3mの掘り込みの中に、拳大の礫が詰められていた。SK2は昨年検出したSK18~20の列とほぼ直角である。

### (4) 南東隅櫓について

3区では現況の地形に沿って屈曲するSD8を検出した。昨年度のB区とC区で確認した地固め遺構の延長である。幅は約2.2mで、深さは2か所で確認したが、3区の北部で約0.9m、南部で約0.4mと深さが異なる。城絵図からは南東隅櫓の存在が推定される位置で、今後は斜面の下でSD1・2の延長や方向の変化を確認する予定である。

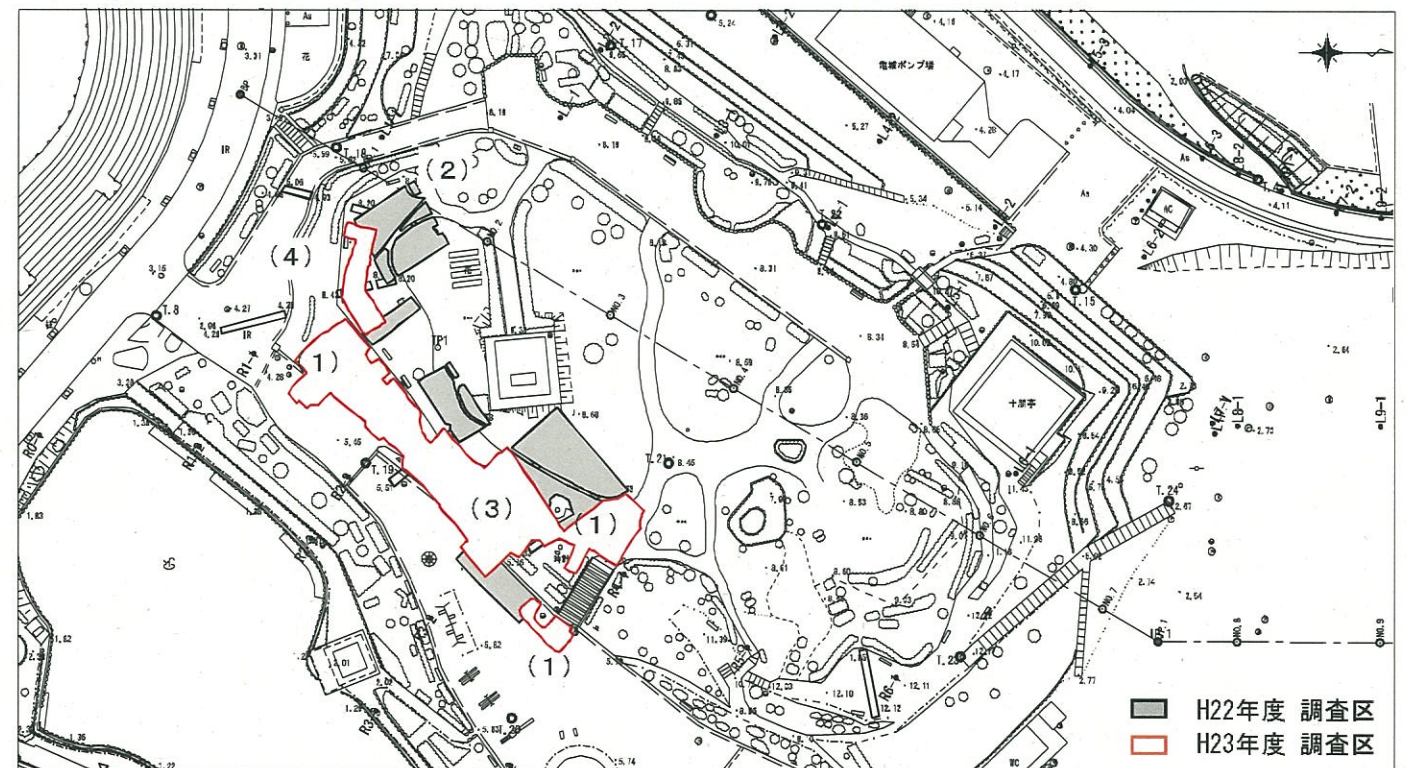


図2 各調査区位置図



# 調査区遺構配置模式図



SK1 断面



SK2 断面



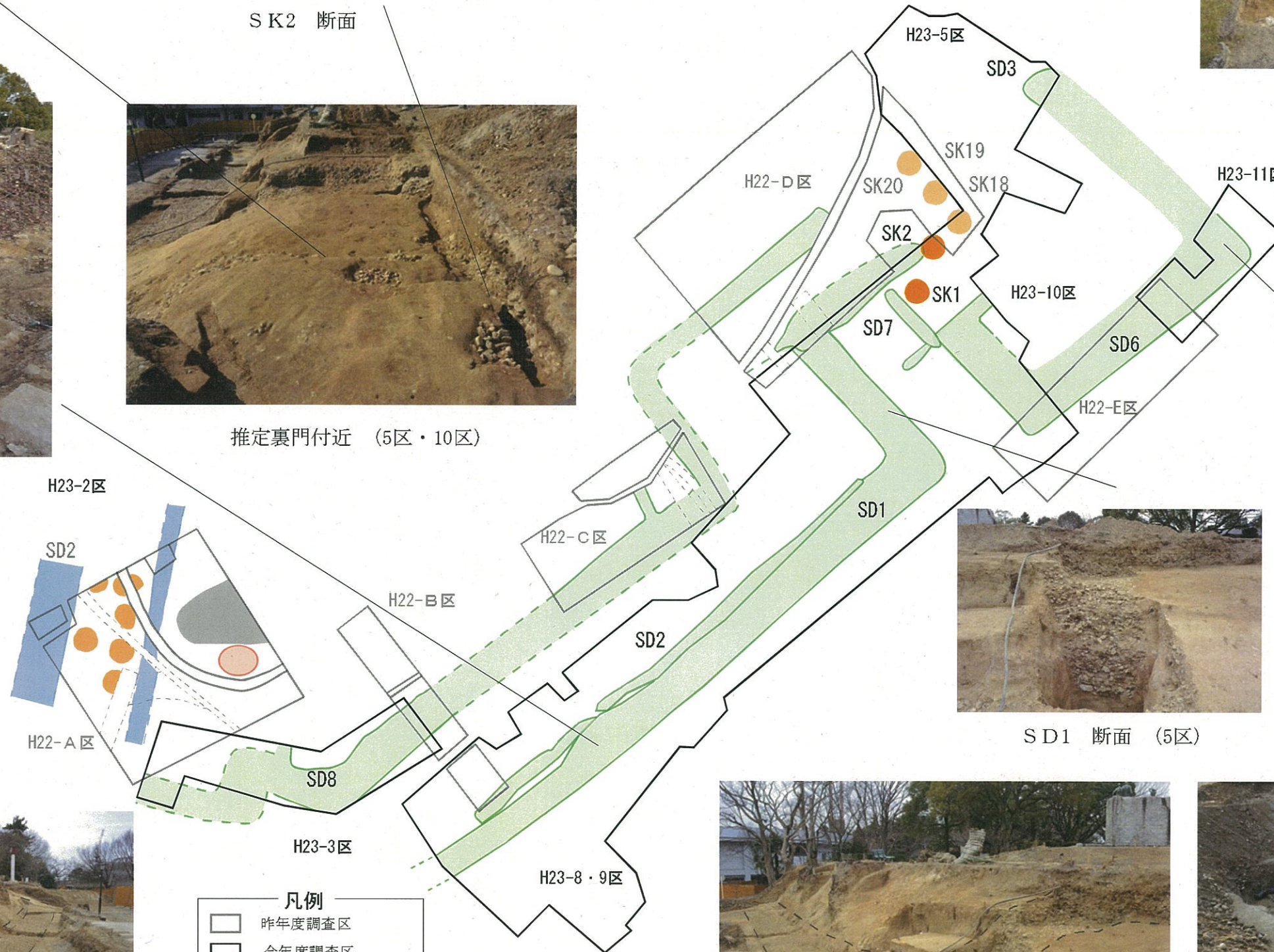
5区 全景



SD1・2断面 (8区)



推定裏門付近 (5区・10区)



SD1 断面 (5区)



SD6 断面 (11区)



SD1 遠景



SD1・2 遠景



SD6 検出後 (11区)